

令和6年度
文部科学省委託調査

**令和6年度「生涯学習を通じた共生社会の
実現に関する調査研究、並びに障害者の
生涯学習推進ポータルサイト構築」
報告書**

令和7年3月

株式会社リベルタス・コンサルティング

目次

第1章 事業概要.....	1
1-1 事業の目的.....	1
1-2 各事業内容の概要.....	1
第2章 障害者、その支援者・保護者を対象とした調査.....	3
2-3 調査概要.....	3
2-4 調査結果.....	6
2-5 主な調査結果の整理.....	28
第3章 自治体、法人、団体等ヒアリング調査.....	30
3-1 調査概要.....	30
3-2 調査結果.....	30
第4章 調査結果のまとめ.....	42
4-1 障害者の生涯学習推進のための方策について.....	42
4-2 「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信のありかたについて.....	43
第5章 文部科学省 障害者学習支援推進室ポータルサイトの開設.....	45
5-1 事業目的.....	45
5-2 既存のHPの現状・課題.....	45
5-3 ポータルサイト開設の方針.....	47
5-4 開発内容.....	48

第1章 事業概要

1-1 事業の目的

障害者権利条約の批准や改正障害者基本法の趣旨及び平成 28 年 4 月からの障害者差別解消法の施行等も踏まえ、学校卒業後の障害者が社会で自立して生きるために必要となる力を維持・開発し、共生社会の実現に向けた取組を推進することが求められている。

このことから、学校卒業後の障害者について、学校から社会への移行期や人生の各ライフステージにおける効果的な学習に係る支援の推進に向けて、①障害者、その支援者・保護者を対象としたアンケート調査、ヒアリング調査、②自治体ヒアリング調査を通して、「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信のありかたについての把握・分析など、専門的な調査研究を実施する。そして、調査研究の成果物として、障害者の生涯学習推進ポータルサイトを作成し、障害者の生涯学習の普及・啓発を目的とする。

1-2 各事業内容の概要

本事業では、以下の内容を実施した。

1-2-1 障害者、その支援者・保護者を対象とした調査

障害者の生涯学習に関する情報収集の実態及びその他の生涯学習に関する経験等について把握し、今後、生涯学習情報の発信・周知をはじめとする障害者の生涯学習推進に資するデータを得るため、障害者本人またはその家族を対象としたモニターアンケートを実施した。また、障害者の生涯学習プログラムを主宰する NPO 団体に協力を依頼し、生涯学習に取り組んでいる障害者に対し、ヒアリング調査を実施した。

1-2-2 自治体、法人、団体等ヒアリング調査

「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信の実態を把握するため、先進的に情報発信に取り組んでいる自治体等にヒアリング調査を実施し、情報発信の内容や方法、成果、課題を把握、整理した。

1-2-3 文部科学省 障害者学習支援推進室ポータルサイトの開設

障害者、その支援者・保護者を対象とした調査及び自治体、法人、団体等ヒアリング調査の結果を踏まえ、今後の障害者の生涯学習の普及・啓発に資するポータルサイトを作成した。

第2章 障害者、その支援者・保護者を対象とした調査

2-3 調査概要

2-3-1 調査目的

本調査は、障害者の生涯学習に関する情報収集の実態及びその他の生涯学習に関する経験等について把握し、今後、生涯学習情報の発信・周知をはじめとする障害者の生涯学習推進に資するデータをを得ることを目的とする。

2-3-2 調査内容

(1) アンケート調査

① 調査方法

無記名式のインターネット方式

② 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・ 普段の生活における情報収集の方法
- ・ (生涯学習に取り組んでいる場合) 生涯学習活動に関する情報の入手元
- ・ (生涯学習に取り組んでいる場合) 生涯学習への関心の有無
- ・ 地域の生涯学習機会に関する認知度
- ・ 生涯学習活動に関する情報を収集する上で利用しやすいと思う方法 等

③ 調査対象及び回収結果

インターネット調査会社が保有するリサーチモニターのうち、以下の調査対象に該当する者、またはその者と同居している家族に回答を依頼した (500 件)。

- ・ 18 歳以上 79 歳以下の障害者¹
- ・ 調査対象である障害者の介助や支援をしている同居家族

¹ 障害が先天的なものであるか後天的なものであるかは問わず対象とした。

図表 2-1 調査対象者の間柄 (n=500)

障害のある方	人	%
回答者本人	260	52.0%
配偶者	123	24.6%
父親	30	6.0%
母親	35	7.0%
兄弟	15	3.0%
姉妹	10	2.0%
お子様 (第1子)	18	3.6%
お子様 (第2子)	6	1.2%
お子様 (第3子)	3	0.6%
回答件数	500	100.0%

④調査期間

令和6年12月6日(金)～令和6年12月17日(火)

(2)ヒアリング調査

①調査方法

障害者の生涯学習プログラムを主宰する NPO 団体に協力を依頼し、団体に活動している障害者に対し、ヒアリング調査を実施した。調査方法はすべてオンラインによる聞き取りとした。

②調査内容

- ・ 本人の情報 (性年代、障害の程度等)
 - ・ 生涯学習への参加のきっかけ (どのように情報を得たか)
 - ・ 生涯学習に取り組みたいと思ったときの情報収集の方法
 - ・ どのような媒体・手段が、情報源として活用しやすいと思うか、またその理由
 - ・ インターネットでの情報収集時に困難を感じることはあるか
 - ・ 生涯学習について、どのような情報が欲しいか
- 等

③調査対象

障害者の生涯学習プログラムを主宰する NPO 団体 2 団体より、生涯学習に取り組む計 6 名の障害者を紹介いただき、ヒアリングを実施した。

- ・ A 団体（ボッチャやソフトボール等、障害の有無に関わらず参加できるスポーツ教室等を主催）

表記	年齢	性別	障害種別・特性
A 氏	60 代	男性	脳梗塞による後天的な肢体不自由 (左半身が不随で車いすを利用)
B 氏	60 代	男性	先天的な視覚障害 (中心暗転、視野狭窄あり)

- ・ B 団体（障害者就労継続支援事業を運営すると同時に、学習・文化芸術・情報保障等のジャンルで、障害の有無に関わらず参加できる学習プログラム等を主催）

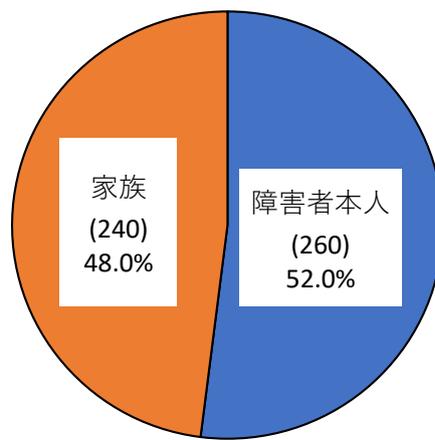
表記	年齢	性別	障害種別・特性
C 氏	40 代	女性	聴覚過敏、パニックになりやすい
D 氏	40 代	男性	高次脳機能障害（後天性）、てんかん
E 氏	80 代	男性	統合失調症、精神障害
F 氏	50 代	男性	知的障害

2-4 調査結果

2-4-1 回答者

本調査の回答者は以下の通り。回答のうち 52.0%が障害者本人によるものであり、48.0%が障害者の同居の家族によるものである。

図表 2-2 回答者：n=500

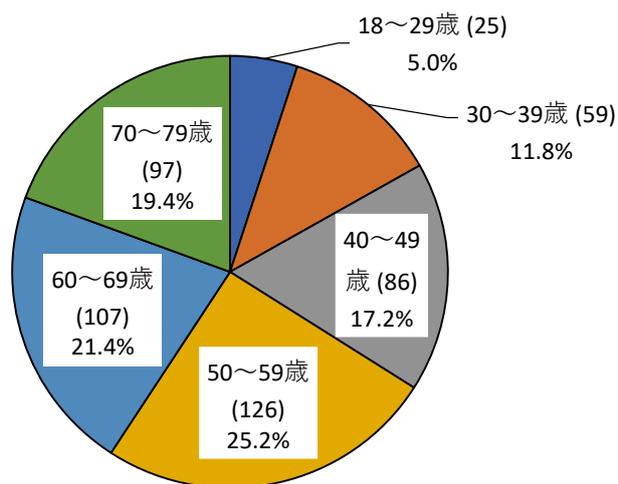


2-4-2 障害者の属性

(1) 年齢

障害者の年齢の分布は以下の通り。

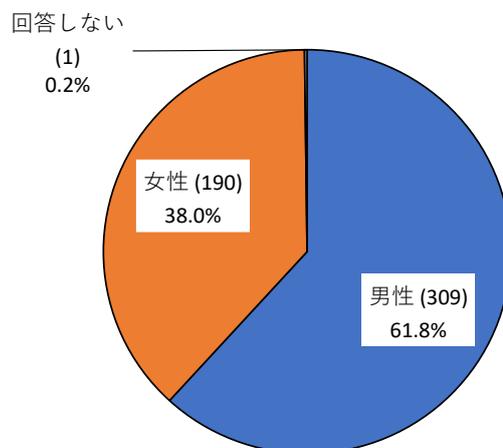
図表 2-3 年齢 : n=500



(2) 性別

障害者の性別は以下の通り。

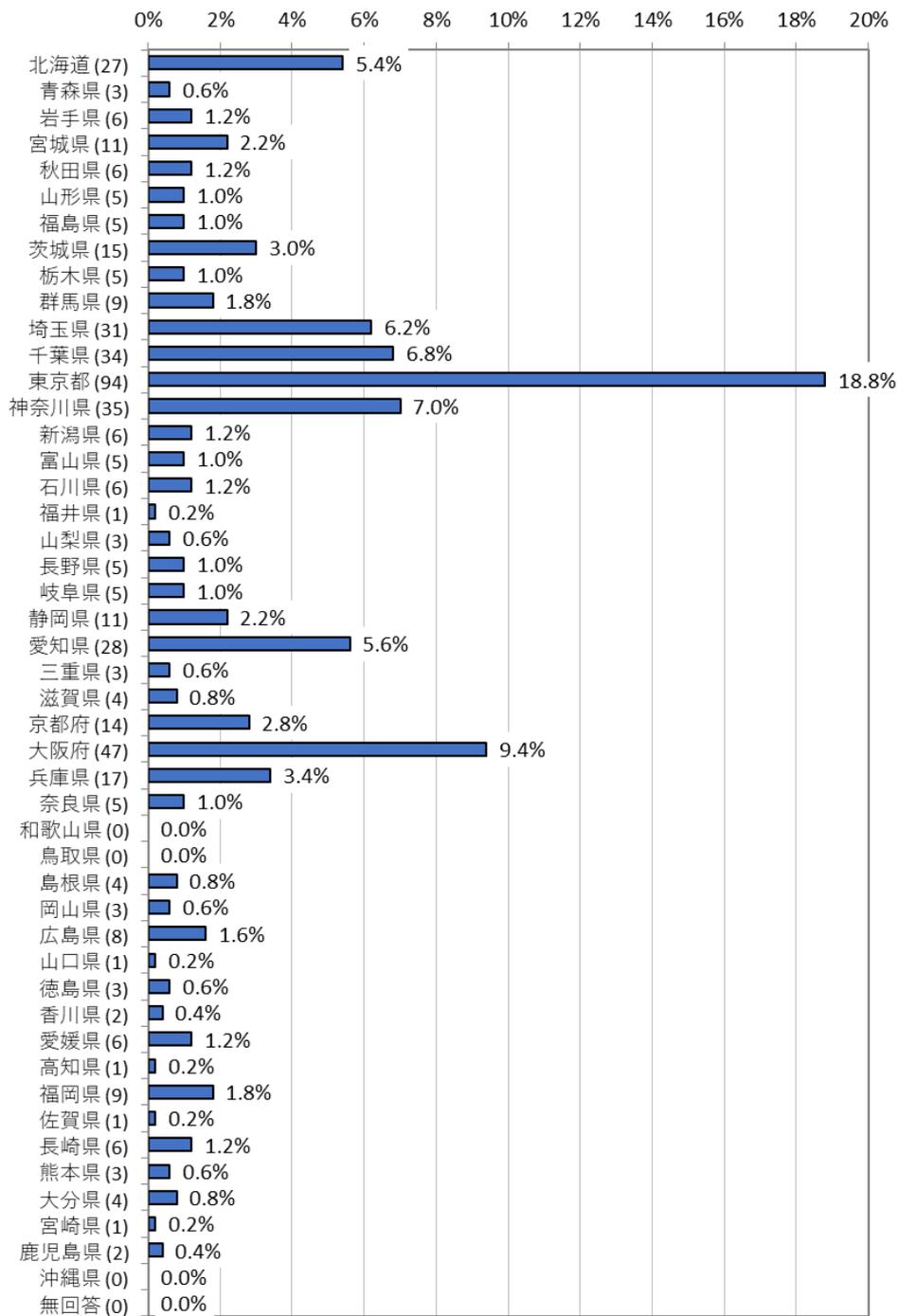
図表 2-4 性別 : n=500



(3) 居住地域

障害者の居住地域は以下の通り。「東京都」の割合が18.8%と最も高い。

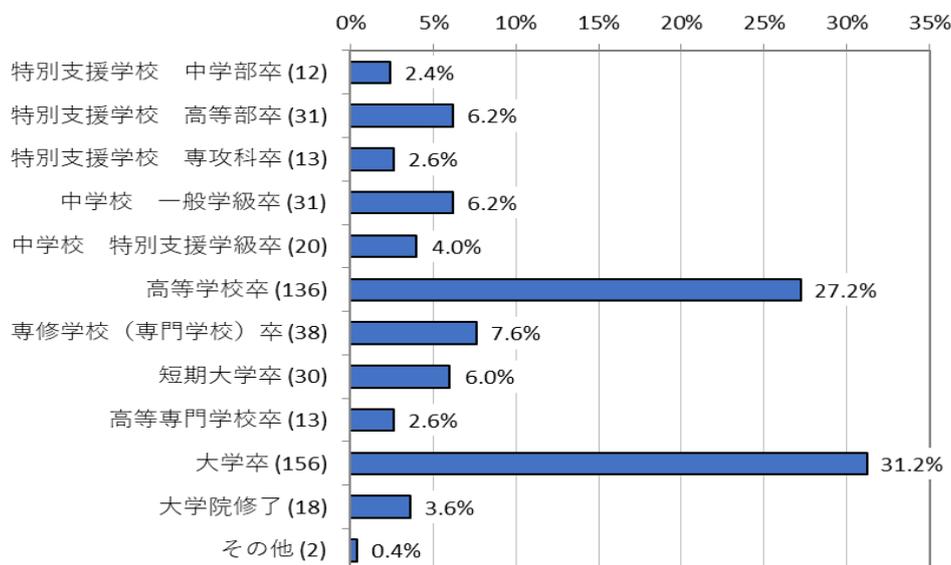
図表 2-5 居住地域：n=500



(4)最終学歴

障害者の最終学歴は以下の通り。

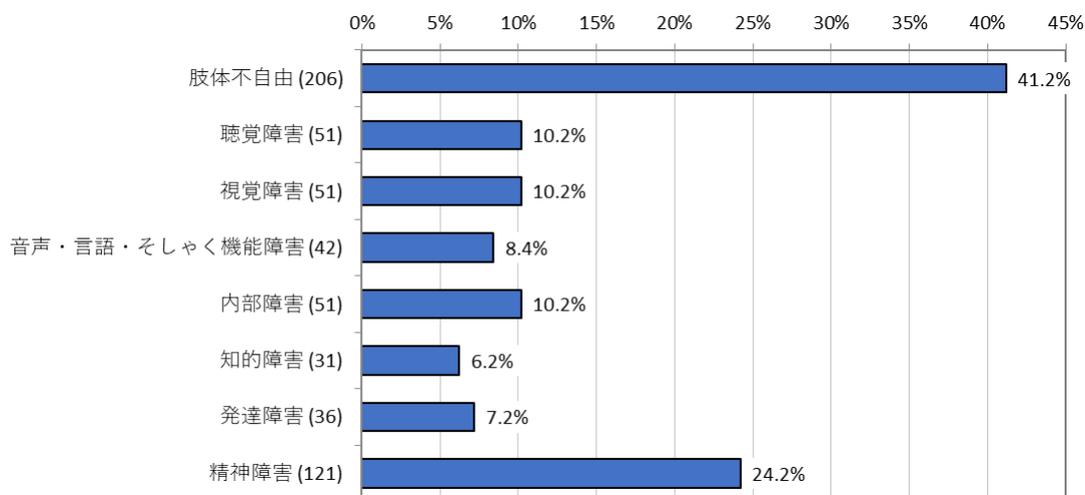
図表 2-6 最終学歴 : n=500



(5)障害の種類

障害の種類は、「肢体不自由」の割合が最も高く、41.2%となっている。次いで「精神障害」(24.2%)が続く。

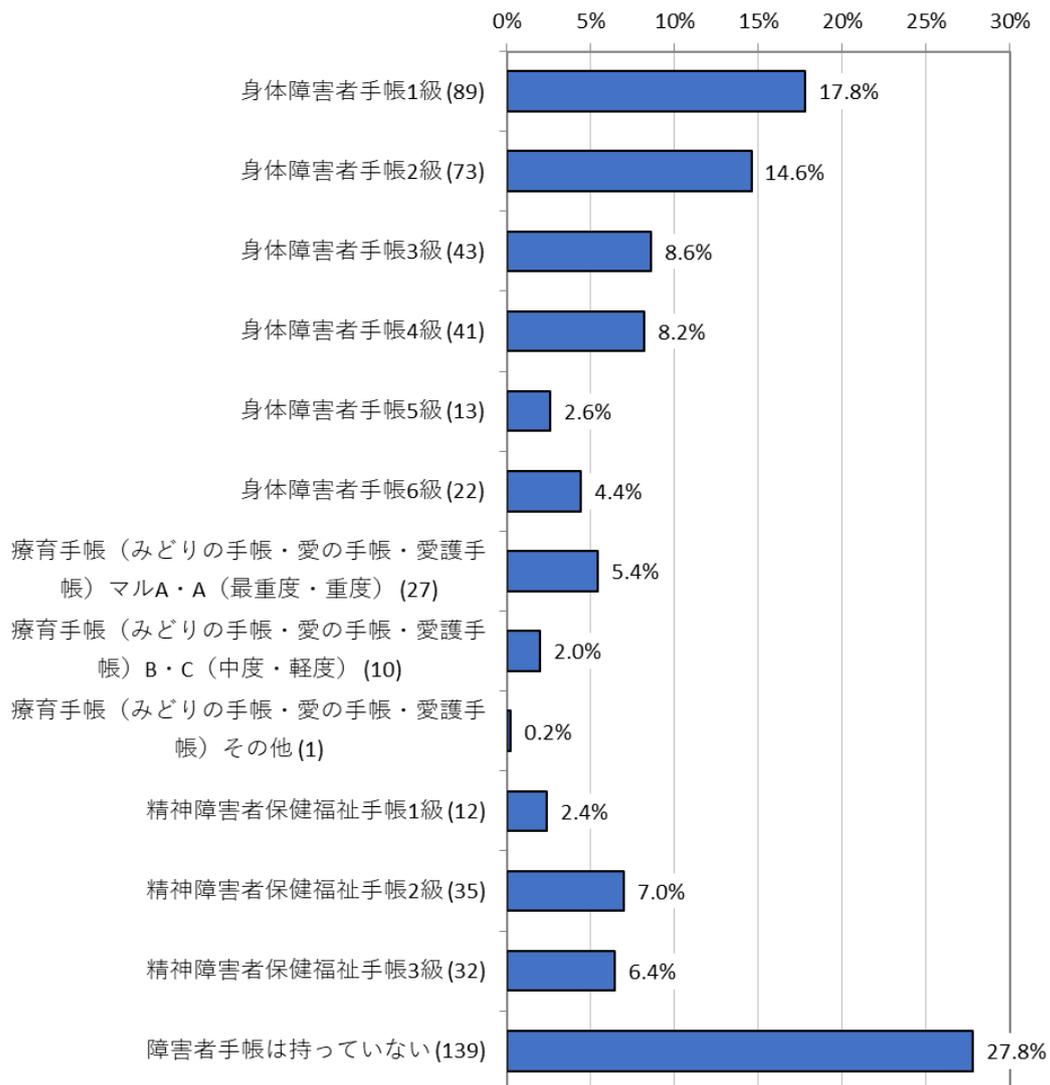
図表 2-7 障害の種類（複数回答） : n=500



(6) 障害者手帳の保有状況

障害者手帳の保有状況について、「障害者手帳は持っていない」割合が27.8%であった。障害者手帳を持っている人の中では、「身体障害者手帳1級(17.8%)」「身体障害者手帳2級(14.6%)」の割合が高い。

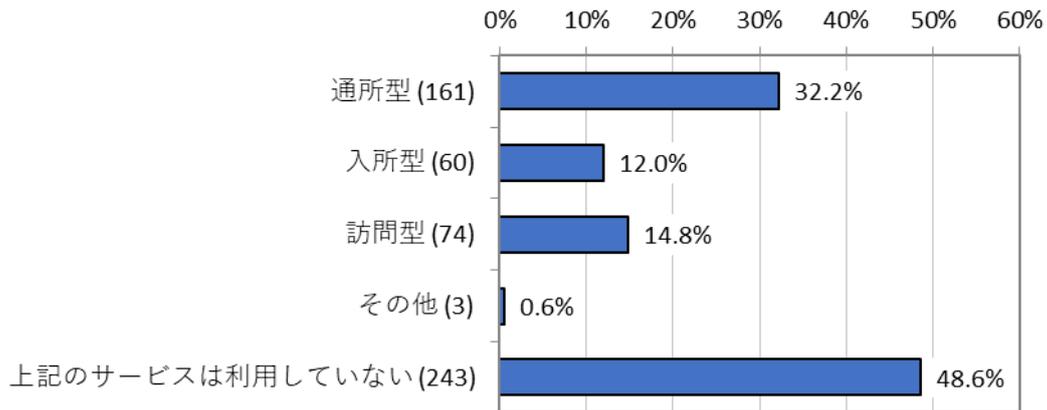
図表 2-8 障害者手帳の保有状況（複数回答）：n=500



(7) 障害福祉サービスの利用の有無

障害福祉サービスの利用状況を見ると、何らかのサービスを利用している割合と「サービスは利用していない」割合は、それぞれ約半数であった。

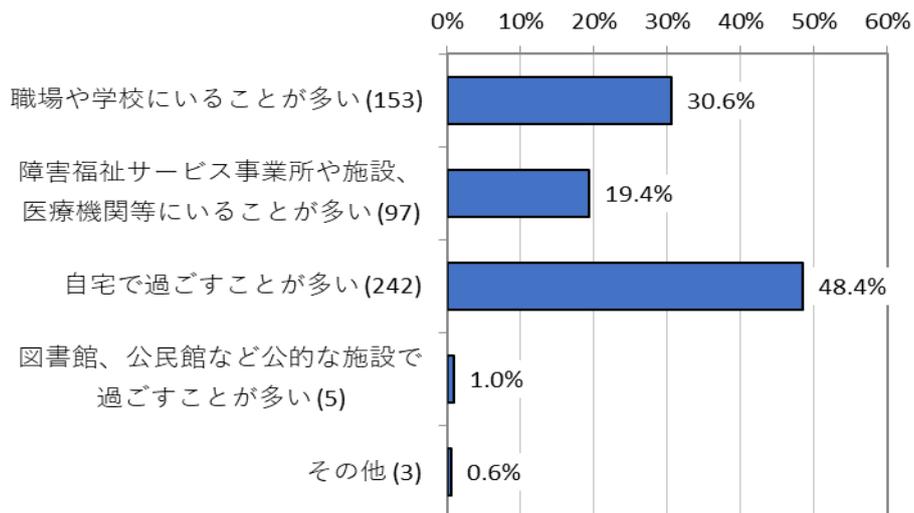
図表 2-9 障害福祉サービスの利用の有無：n=500



(8) 日中の過ごし方

日中の過ごし方をみると、「自宅で過ごすことが多い」の割合が 48.4%と最も高い。

図表 2-10 日中の過ごし方：n=500



2-4-3 生涯学習への取組状況

以降の設問における「生涯学習」の範囲については、調査票に以下の注記を掲載した。

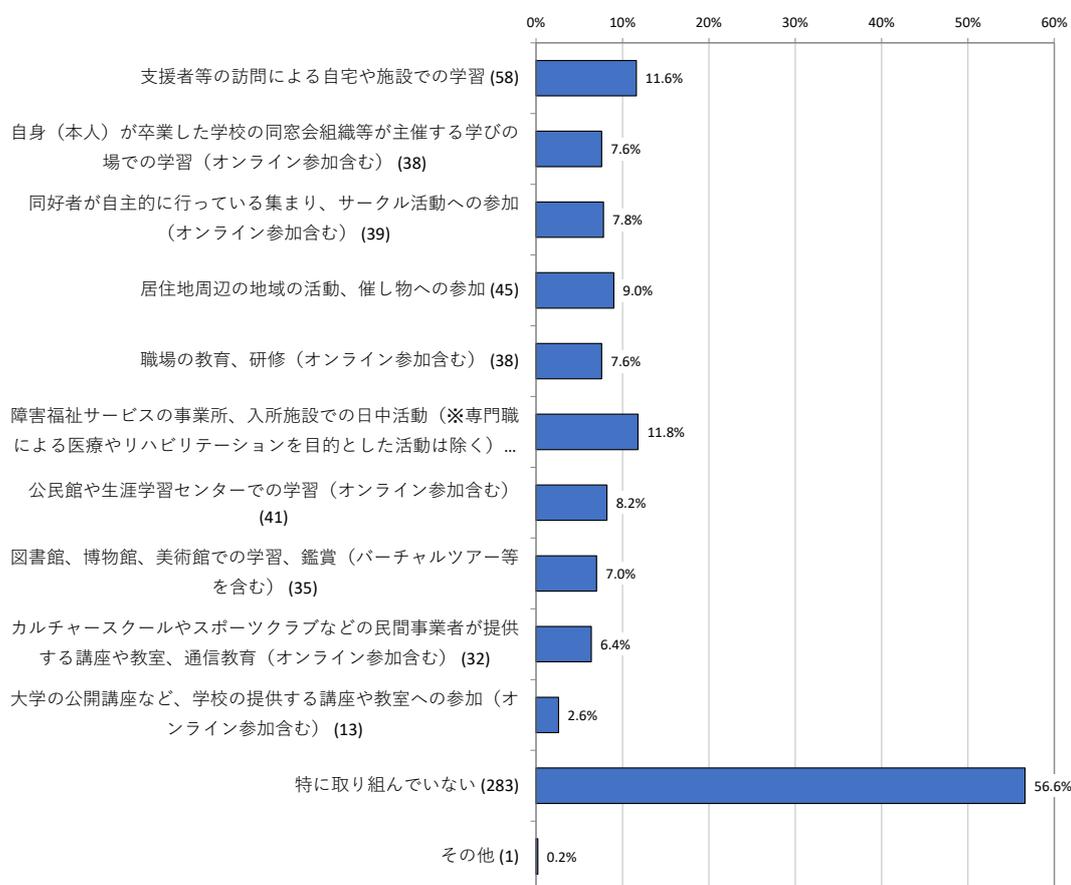
【本調査における生涯学習について】

- ・ 本調査における「生涯学習」とは、ご自身（ご本人）の学校教育課程（授業等）以外での学修や活動の機会、社会参加の機会全般を指し、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、趣味等を広く含みます。
- ・ ただし、テレビ・ラジオ番組やインターネット動画の視聴や、書籍等による自主学習（読書活動のみ）は本調査における「生涯学習」からは除きます。
- ・ また、医師や看護師、理学療法士や作業療法士など専門職による医療やリハビリテーションを目的とした活動も該当しません。

(1) この1年間に取り組んだ生涯学習の内容

「この1年くらいの間に月に1日以上」、生涯学習に取り組んだかについて聞いたところ、56.6%が「特に取り組んでいない」と回答した。その他、生涯学習の内容ごとに割合に大きな差は見られない。

図表 2-11 この1年間に取り組んだ生涯学習の内容（複数回答）：n=500



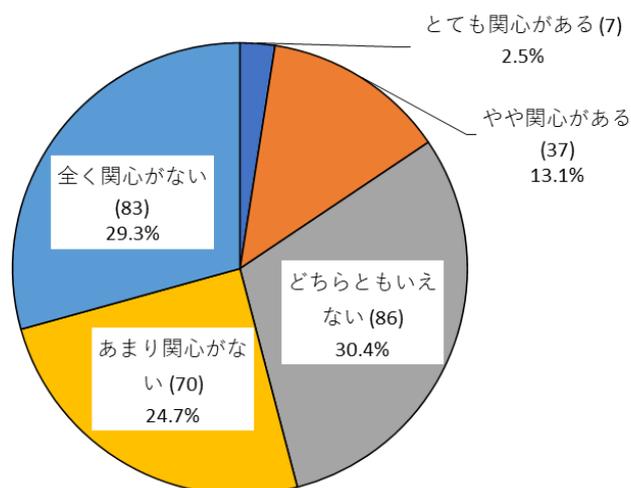
■ヒアリング結果より（取り組んでいる生涯学習活動と、取り組み始めて変わったこと）

- ・ ボッチャに取り組んでいる。頻度は月に 3 回ほどで、参加し始めて 3 年ほど経つ。他の参加者も協力的であることから、障害があっても気兼ねなく楽しむことができている。以前は家にいることが多かったが、ボッチャに取り組む始めてからは出かけることが増えた。(A 氏)
- ・ アート活動等、団体が主催する各種の生涯学習プログラムに参加している。以前は引きこもりがちで人と関わるのが苦手だったが、活動に参加する中で苦手を克服しつつある。地域の方との交流ができるようになったほか、最近では団体が主催する地域のイベントで司会まで務めるようになった。(C 氏)
- ・ アート活動等、団体が主催する各種の生涯学習プログラムに参加している。自宅には会話の相手がおらず精神的に塞いでしまうため、仲間と交流できる場があることはありがたい。(E 氏)

(2) (生涯学習に取り組んでいない場合) 生涯学習への関心の有無

生涯学習に取り組んでいない人に生涯学習への関心の有無を聞いたところ、「全く関心がない」の割合が 29.3%、「あまり関心がない」の割合が 24.7%と高い一方、「とても関心がある」「やや関心がある」の割合を合わせても約 15%に留まった。

図表 2-12 生涯学習への関心の有無 : n=283

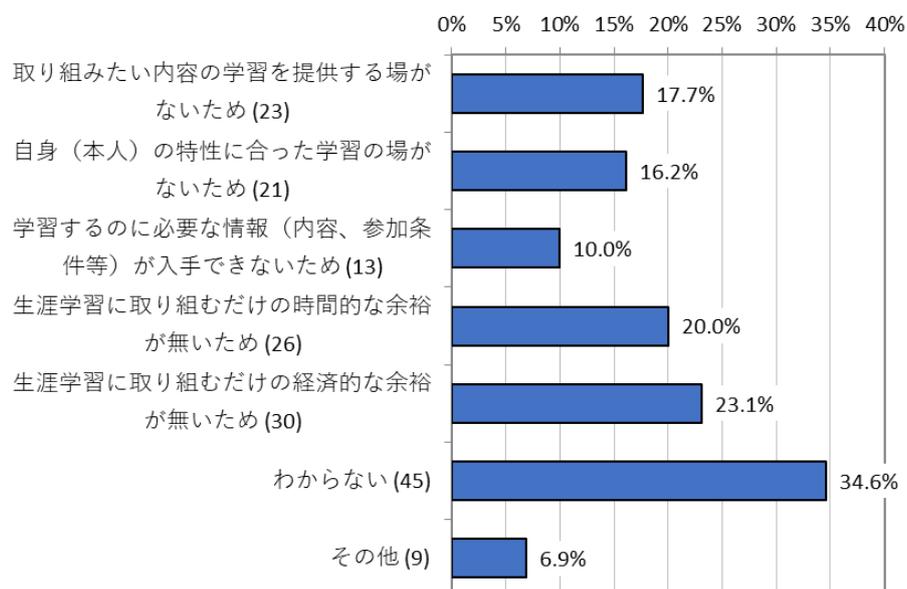


(3) (とても関心がある/やや関心がある/どちらともいえない の場合)

生涯学習に取り組んでいない理由

生涯学習に取り組んでいないが、生涯学習について「とても関心がある」「やや関心がある」「どちらともいえない」と回答した人に、生涯学習に取り組んでいない理由について聞いたところ、「わからない」の割合が34.6%と最も高い。

図表 2-13 生涯学習に取り組んでいない理由（複数回答）：n=130

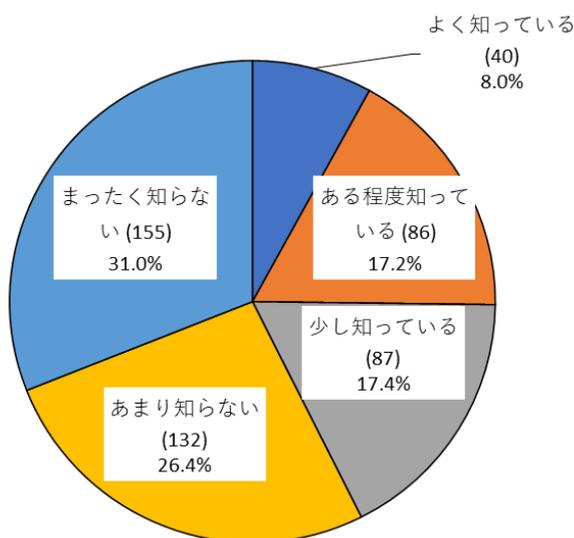


(4) 地域で取り組むことができる生涯学習の認知状況

住んでいる地域でどのような生涯学習に取り組むことができるか、どれくらい知っているかを聞いたところ、「まったく知らない」の割合が 31.0%、「あまり知らない」の割合が 26.4%と高く、「よく知っている」と回答したのは 8.0%に留まった。

なお、生涯学習への関心の有無別にみると、関心が薄ければ薄いほど、「まったく知らない」の割合が高くなっており（赤枠内）、全く関心がない人の 81.9%は「まったく知らない」と回答している。生涯学習に関する認知の度合いと、関心の度合いには関連が見られる。

図表 2-14 地域で取り組むことができる生涯学習の認知状況：n=500



図表 2-15 地域で取り組むことができる生涯学習の認知状況

(生涯学習への関心の有無別)：n=283

	全体	よく知っている	ある程度知ってい	少し知っている	あまり知らない	まったく知らない
全体	283 (100.0%)	3 (1.1%)	7 (2.5%)	33 (11.7%)	97 (34.3%)	143 (50.5%)
とても関心がある	7 (100.0%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	2 (28.6%)	3 (42.9%)
やや関心がある	37 (100.0%)	0 (0.0%)	2 (5.4%)	8 (21.6%)	20 (54.1%)	7 (18.9%)
どちらともいえない	86 (100.0%)	1 (1.2%)	2 (2.3%)	14 (16.3%)	35 (40.7%)	34 (39.5%)
あまり関心がない	70 (100.0%)	0 (0.0%)	2 (2.9%)	5 (7.1%)	32 (45.7%)	31 (44.3%)
全く関心がない	83 (100.0%)	1 (1.2%)	1 (1.2%)	5 (6.0%)	3 (9.6%)	68 (81.9%)

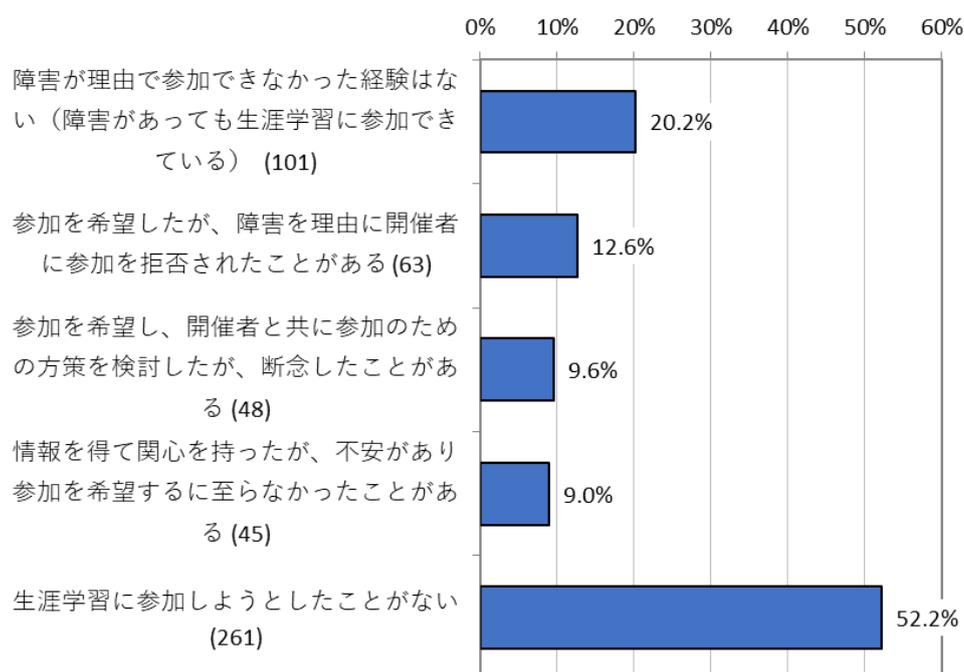
2-4-4 生涯学習に関する経験

(1) 障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の有無

自身（本人）の障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の有無を見ると、「生涯学習に参加しようとしたことがない」を除けば、「障害が理由で参加できなかった経験はない（障害があっても生涯学習に参加できている）」の割合が 20.2%と最も高い。しかし、「参加を拒否されたことがある」「参加を断念したことがある」「参加を希望するに至らなかったことがある」のいずれかを回答した人も 27.6%に上り²、一定数の障害者が、生涯学習への参加にハードルを感じた経験を持つことがわかる。

なお、「生涯学習に参加しようとしたことがない」と回答した 261 名を除くと、参加しようとしたことがある人（239 名）のうち、57.7%（138 名）が生涯学習への参加にハードルを感じた経験を持つ。

図表 2-16 障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の有無（複数回答）：n=500



² 選択肢のうち「障害が理由で参加できなかった経験はない（障害があっても生涯学習に参加できている）」ならびに「生涯学習に参加しようとしたことがない」は、それ以外の選択肢との複数回答を不可としている。

(2) 障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の内容・参加できなかった理由およびどのような配慮があれば参加することができたか

障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の具体的な内容と、同経験についてどのような配慮があれば参加することができたと思うかについての自由記述の内容は下記の通り。

図表 2-17 障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の内容・理由・どのような配慮があれば参加できたか

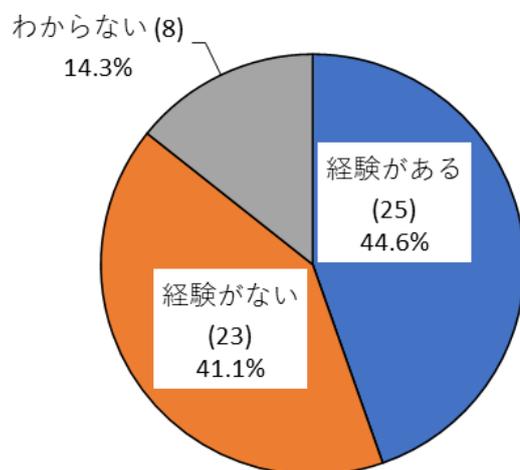
	障害種別	障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の内容・参加できなかった理由	どのような配慮があれば、参加することができたと思うか
参加を希望したが、障害を理由に開催者に参加を拒否されたことがある	肢体不自由	安全面	人員強化
	肢体不自由	生涯学習の実施場所迄の移動手段のとぼしさ	移動手段の手助けや補助があればよい
	聴覚障害	手話通訳がみとめられなかった	手話通訳が、みとめられること
	聴覚障害	話が聞こえにくいため	大きな声で話してもらうこと
	知的障害	指導の仕方が難しいようで尻込みされた	-
	知的障害	親子劇場に単独で参加しようとして断られた	サポート体制がしっかりしていれば良かった
	精神障害	英会話サークルに障害を理由に入れなかった。	サークルに誰でも入れるようにすること
参加を希望し、開催者と共に参加のための方策を検討したが、断念したことがある	肢体不自由	安全面	施設のバリアフリー化
	肢体不自由	手と足が不自由な為、できない事が多く、辛い思いをしています	ヘルパーや家族の補助があれば
	肢体不自由・精神障害	ある武道ですが、どうしても通う手段に無理があった。特に公共交通機関	福祉車両の所有
	視覚障害	施設に対応できる設備がない	-
	視覚障害	部屋が狭かった	部屋が広ければ
	内部障害	3ヶ月の学習だったが、週3日は透析で、その間勉強出来ない	透析日以外で、補習等があれば
	知的障害	理解できるかが不安だった	一人一人へのカウンセリングを重視する
	発達障害	人が多いと難しい	訪問授業
情報が得て関心を持ったが、不安があり参加を希望するに至らなかったことがある	肢体不自由	手話の教室に行きたかったが、駐車場、車いす、移動等いろいろ考えてしまって参加する気がなくなった	駐車場から現場までだれか車いすを含め気軽に介助してもらえたら参加したかもしれない
	肢体不自由・視覚障害	自力で通えない。家に車がない。	会場までの送迎
	肢体不自由・精神障害	退職後、資格を取ろうと通信教育を申し込みしたが、文字の理解が遅く断念してしまった	-

聴覚障害	周りの声が聞こえないハンディから、積極的に なれない	聴覚に障害がある人の対応ができるサポ ート役として、家族も一緒に参加できるイベン ト
聴覚障害	講演等、補聴器をしていても聞き取りづらい 経験（参加人数や部屋の構造に大いに関 係する）が半ばトラウマ状態になっている面が ある	講演内容の要約資料とか聞き取りやすい 最前列優先案内とか、障害のある方でも 参加できることの告知
聴覚障害	音声が聞き取りにくいからです	音声を文字にしてくれる
知的障害	長時間耐えられるか不安	-
知的障害	情報が少ないこと、参加した際の支援に不安 があること	参加サポートの具体的情報
知的障害	健常者と同じことができないかもしれない不安	サポーターがついてくれると安心
精神障害	体調が悪く、起きることが出来なかった	1週間以上前から体調を整える必要性が あった
精神障害	学習の内容と合わなかった	参加するにあたって自治体から情報が欲し い
精神障害	障害者支援施設で面談したが、本人は作業 等をする事が出来ないと言って参加すること はなかった。こだわりが強くあり自分が納得出来 ないことはやらない。	-

(3) (最終学歴が特別支援学校の場合) 特別支援学校における、学校卒業後の学び・余暇に関する指導や施設の紹介等を受けた経験の有無

最終学歴が特別支援学校であると回答した人に、学校卒業後の学び・余暇に関する指導や施設の紹介等を受けた経験の有無を聞いたところ、「経験がある」と「経験がない」の割合はいずれも約4割となっている。

図表 2-18 特別支援学校における、学校卒業後の学び・余暇に関する指導や施設の紹介等を受けた経験の有無：n=56

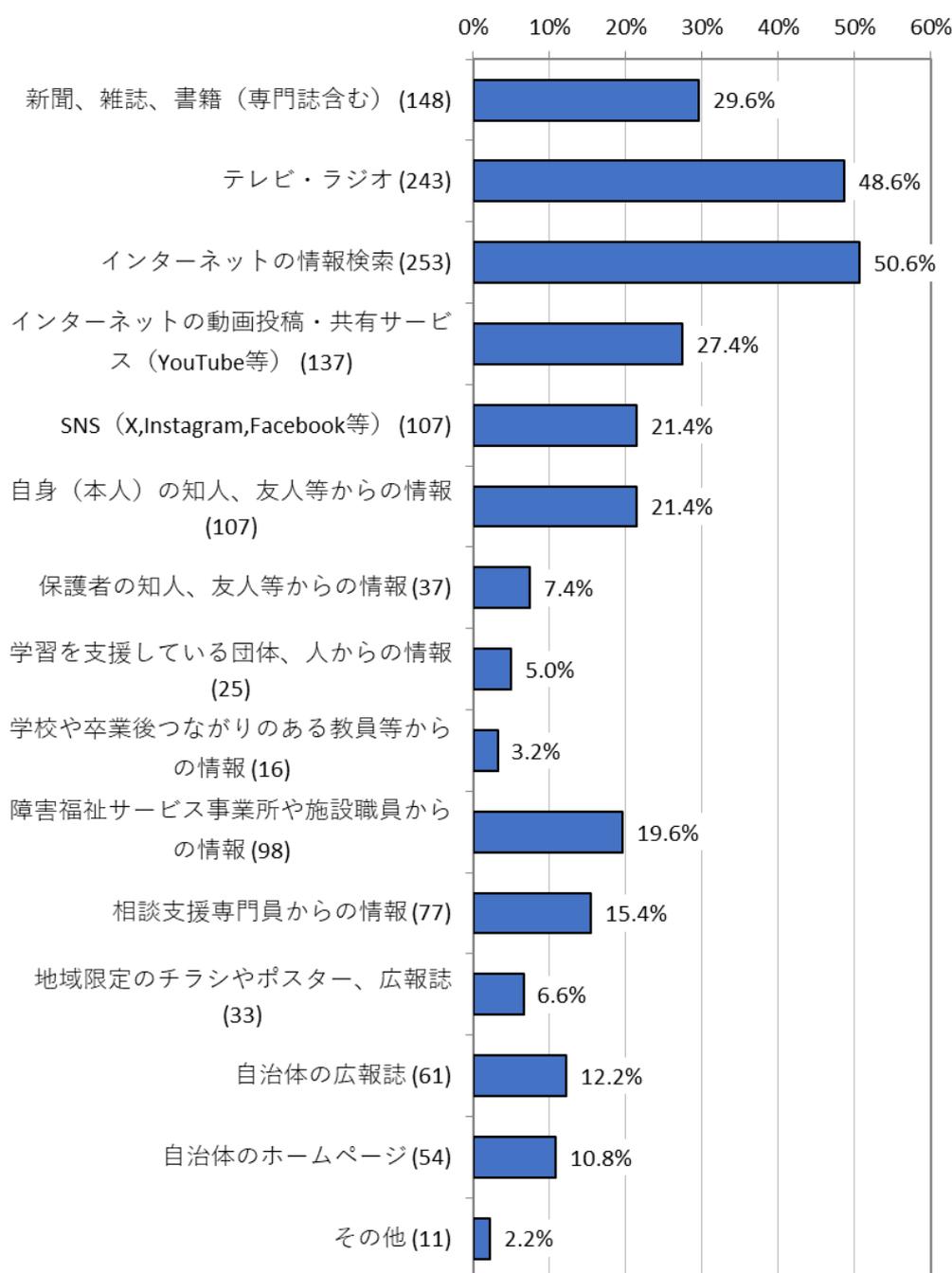


2-4-5 生涯学習に関する情報収集について

(1) 普段の生活における情報収集の方法（生涯学習に関わる情報収集に限らず）

普段の生活における情報収集の方法についてみると、「インターネットの情報検索」の割合が 50.0%、「テレビ・ラジオ」の割合が 48.6%と高く、多くの障害者が情報源として活用している。

図表 2-19 普段の生活における情報収集の方法（複数回答）：n=500



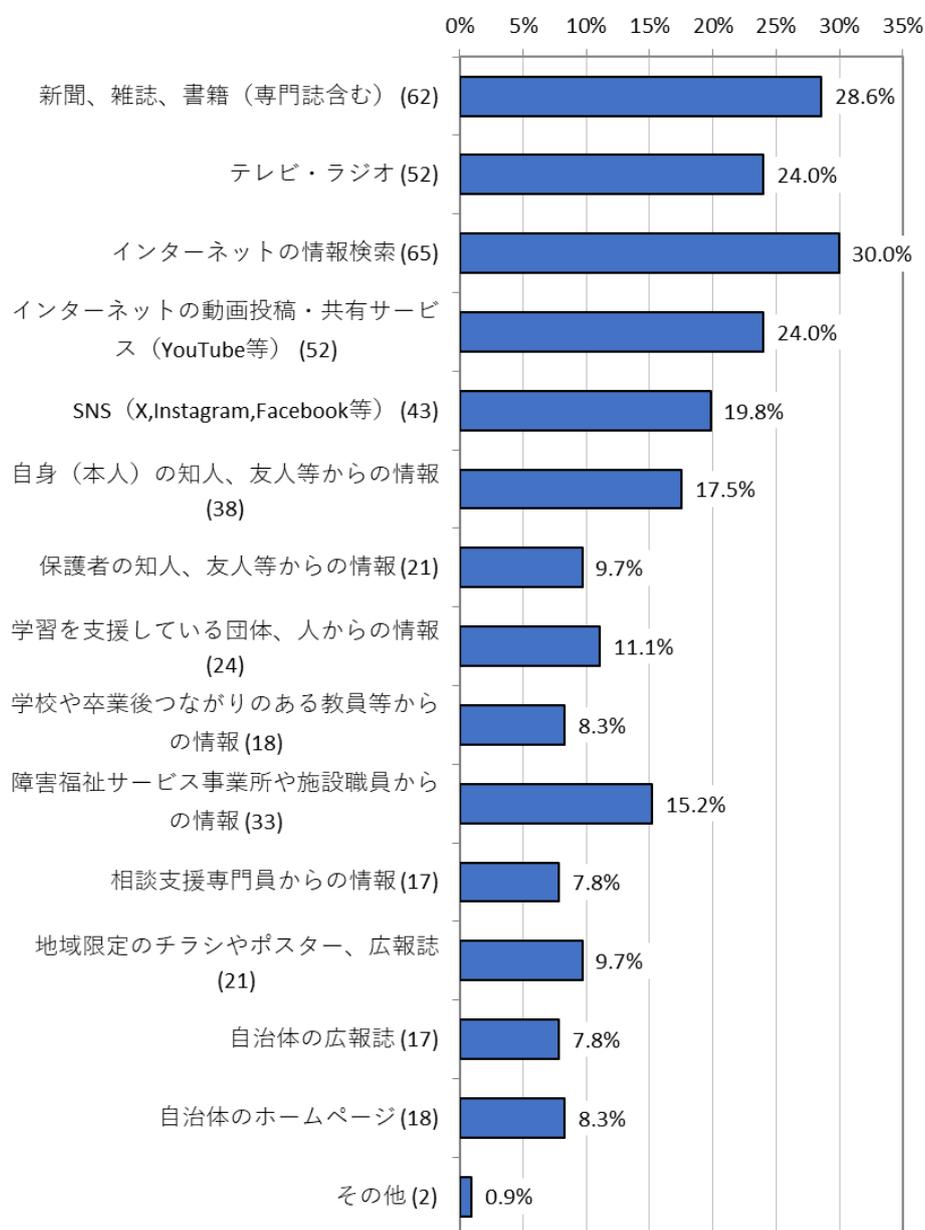
■ヒアリング結果より（普段の情報収集の方法）

- ・ インターネットや新聞の折り込みで入ってくる市の広報誌が主な情報源。インターネットは、自分の関心のあるものを検索することが中心。(A氏)
- ・ 普段の情報収集はインターネットが中心。(B氏)
- ・ なにか活動に参加したいと思うときの情報源は、スマホのアプリやインターネット検索で探すことが多い。最近は町の広報誌を見るようになって、サークルがあることを知ったり、町のイベントに参加したりしている。(C氏)
- ・ 携帯電話を持っていない。近所に街の広報チラシが置いてある場所があり、取りに行くことがある。(D氏)
- ・ インターネットは使っていない。(E氏)
- ・ インターネットを使うことはない。自治体のチラシや広報誌もあまり見ることはない。(F氏)

(2) (2-4-3 (1) で、なんらかの生涯学習に取り組んだと回答した場合) 取り組んだ生涯学習活動に関する情報の入手元

生涯学習に取り組んだ場合の、生涯学習活動に関する情報の入手元をみると、「新聞、雑誌、書籍（専門誌含む）」(28.6%)、「テレビ・ラジオ」(24.0%) といったマスメディアや、「インターネットの情報検索」(30.0%) 「インターネットの動画投稿・共有サービス (YouTube等)」(24.0%) といったインターネットによる情報の入手の割合が高い。

図表 2-20 取り組んだ生涯学習活動に関する情報の入手元（複数回答）：n=217



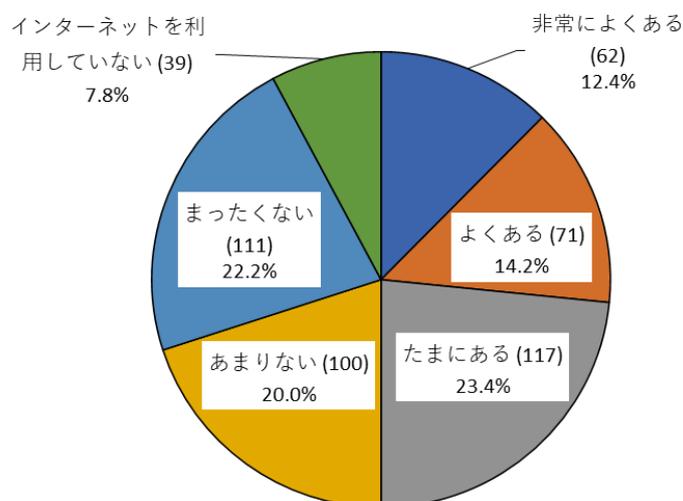
■ヒアリング結果より（活動し始めたきっかけ）

- ・ 市の広報誌で団体の活動を知り、初めは体験会のような形式で参加し始めた。ボッチャをやってみたくて思っていたわけではなく、障害で外出が少なくなったところを見かねた配偶者に連れ出されて参加したことがきっかけだった。（A氏）
- ・ 団体代表が知り合いで、一緒に活動しないかと誘われたのがきっかけ。自分がプレーするだけでなく、現在は、団体代表と共にボッチャの指導や審判なども務めるようになった。（B氏）
- ・ 病院から現在通所している就労支援事業所を紹介され、事業所が主催する生涯学習活動に取り組んでいる。（C氏）
- ・ 相談支援事業所を介して現在通所している就労支援事業所に通所するようになり、事業所が主催する生涯学習活動に取り組んでいる。（F氏）

(3) インターネットによる情報収集時の、自身（本人）の障害による困難の有無

インターネットを利用して情報収集を行う際、自身（本人）の障害により困難を感じるかどうか聞いたところ、「非常によくある」の割合が 12.4%、「よくある」の割合が 14.2% となっており、「たまにある」と合計すると回答者全体の約半数に上る。

図表 2-21 インターネットによる情報収集時の、
自身の障害による困難の有無：n=500



(4)インターネットによる情報収集時、特に情報を得ることが難しいと思うとき

(自由記述)

インターネットでの情報収集をする際、特に情報を得ることが難しいと感じるときについての、障害種別の自由記述の内容は下記の通り。

図表 2-22 インターネットによる情報収集時、
特に情報を得ることが難しいと思うとき【障害種別】

肢体不自由	メールアドレスを自分で入れられない。
	手足が不自由なため、スマホをスムーズに使いこなせない。
	手を動かしにくく、文字の入力やスクロールといった操作が難しい。
	手指に後遺症があり不自由でありキーボードが打ちづらいことから、簡単な入力方法ができる機器があるとよいが、それでも難しいと思う。
	視線入力で PC 操作しているので、クリックするアイコンやリンクされている文章が小さいと、選びそこなう時がある。クリックしやすいボタンやアイコンが望ましい。
	手が不自由なので操作に難あり。
	手足の麻痺により震えがでて、上手くアイコンを押せない時がある。震えがおさまるまで待つしかない。
聴覚障害	聴覚障害なので、文章理解が難しい。
	動画で困難を感じる。私は聴覚障害なので音声が入り聞き取れない。どうしても必要な情報ならば、手数をかけて音声出力をBluetoothで補聴器に飛ばす設定にすれば可能だが、普段はそんなことまでしようとは思わず、無音で画像だけを見るか見るのを辞めてしまう。字幕対応してもらうのがベスト。
	音声の情報を聞くのが難しい。音声を文字にしてくれると情報が得やすい。
視覚障害	スマホでは文字が小さすぎて読めない。大きな文字で、かつどこを読んでいるかがわかるようにしてほしい。
	目が疲れる。視力も低いので、長時間見ることが困難である。
	コントラストが低い時に困難を感じる。
知的障害	新聞等文字の書かれたものには見向きもしなくなり、視覚からの情報取得は厳しい。介護士など人から聞く話は少しは理解できていると思うが、同じことを繰り返し行う必要がある。
	情報量が多く、目的の情報を探するのが難しい。
	難解な言葉の理解が難しい。
	文章で書かれたものは、断片的には分かるかもしれないが、それでも難しいと思う。イラストやアクションなら少しは分かりやすいと思う。
発達障害	難しい説明が分からない。
	情報を得る際の本人の精神状態に左右されるところから、リラックスした状況下が最も重要。ゆっくりした本人のペースで取り組むことで成果が上がる。
	文字自体は大丈夫だが、耳からの脳に伝わり方が違うため、かみくだいてもらえないと、勘違いしたようになる。

精神障害	手続きが難しいものや、条件が細かく自分は該当しないのではと思う事に出くわすと、軽いパニック状態になり、内容が理解できず、分からないまま放置したり、手続きをするのをやめてしまったりする。そして、その後に出来なかった事で、落ち込み・うつ状態になってしまい日常生活も不安定になる。
	文字を長い時間見られない。
	高次脳機能障害で記憶障害があり、ネットの記事を見てもすぐ忘れてしまうことが度々ある。簡単にわかりやすい方が理解しやすいと思う。

■ヒアリング結果より（インターネットによる情報収集時の困難の有無）

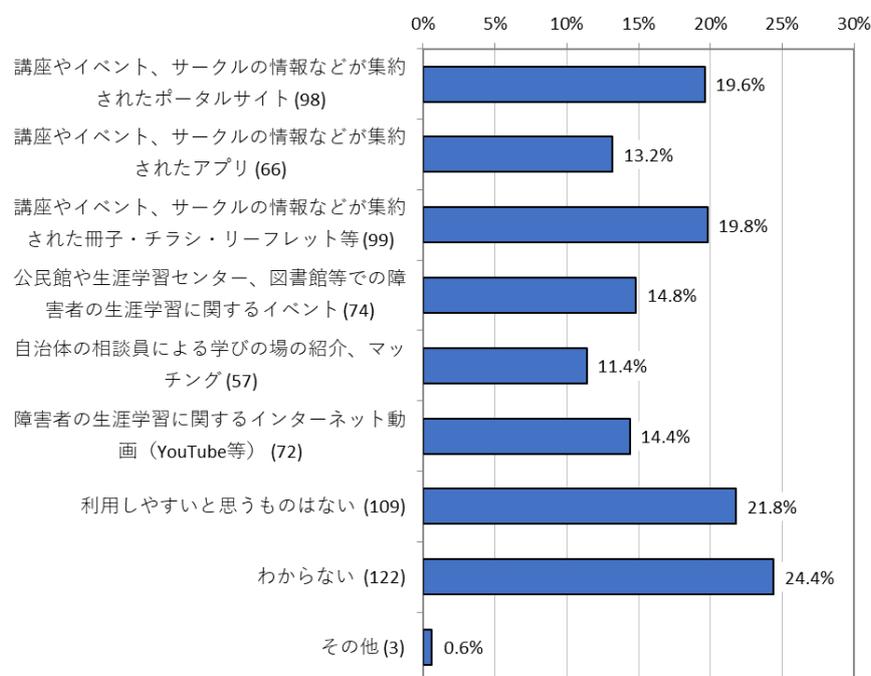
- ・ 普段の情報収集はインターネットが中心だが、情報保障のための機能があり、画面を拡大できるので、視覚障害があるがインターネットの利用に関してそれほど不便はない。（B氏）
- ・ インターネットで情報を探すとき、文字情報だけだと混乱することがある。そのためWeb サイトは文字だけでなく、イラストやカラフルな色使いにしてもらいたい。（C氏）
- ・ インターネット動画の場合、速いテンポで喋られると内容についていけなくなるため、落ち着いたテンポで進行する動画が望ましい。（C氏）

(5)生涯学習に関する情報収集をするうえで利用しやすいと思う方法

今後生涯学習に取り組むとした場合に、情報収集をするうえで利用しやすいと思う手段を聞いたところ、「わからない」(24.4%)と「利用しやすいと思うものはない」(21.8%)を除けば、「講座やイベント、サークルの情報などが集約されたポータルサイト」(19.6%)と「講座やイベント、サークルの情報などが集約された冊子・チラシ・リーフレット等」(19.8%)の割合が比較的高いが、大きな差は見られなかった。

図表 2-23 生涯学習に関する情報収集をするうえで利用しやすいと思う方法

(複数回答) : n=500



■ヒアリング結果より（生涯学習に関する情報収集の方法に関して）

- ・（イベント等に関して）障害者に対する配慮の情報、支援に関する情報があれば、障害者が出かけようとする際に感じるハードルは低くなると思う。実際に自分が障害を持つようになり、障害者が出かける際、いかにハードルがあるかを痛感した。健常者と障害者では、情報の取得の状況や必要な情報が全く異なる。(A氏)
- ・ハード・ソフトいずれの面も、障害者に対する配慮に関する情報発信が充実していれば、障害者でも出かけていけるとわかり、心理的なハードルが下がる。現状、公共施

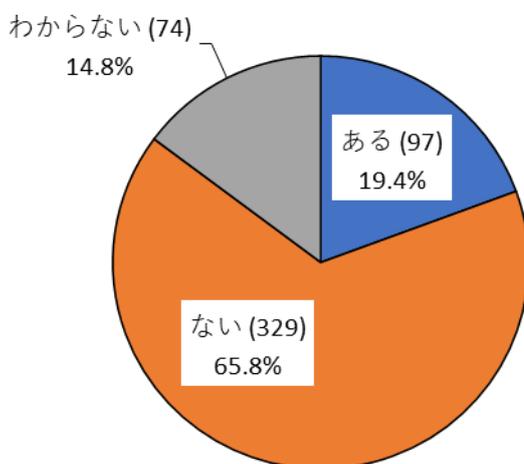
設等では、広報やホームページで公表されている情報だけでは詳しいことがわからない場合が多い。(B氏)

- ・ 自分が求めている内容の活動が、自宅の近くにあり、それに関する情報を集めることができるのが重要。遠方の団体やイベントの情報を得ても、行きたいが遠いから難しいと感じてしまう。あまり地理的に広い範囲の情報が得られても、選ぶのが難しい。地域の情報が集約され、その中から自分が参加したい活動が探せるとよい。(B氏)
- ・ 障害者が出かけようとする際は、ハード面での障壁を感じる場合が多い。また、出かけようとする場所の担当者・スタッフがどれだけ障害について理解があるか・配慮してもらえるかも、町の施設等を利用する際は考慮する。ある程度障害について理解のある環境でないと、出かけたくても出かけられない場合もある。(B氏)
- ・ なにか活動に参加したいと思うときの情報源はスマホのアプリや、インターネット検索で探すことが多い。YouTubeをよく使うので、動画で気軽に情報を得られるとよい。(C氏)

(6) 文部科学省ホームページ「障害者の生涯学習の推進について」の閲覧経験の有無

文部科学省のホームページ「障害者の生涯学習の推進について」を閲覧したことがあるかを聞いたところ、「ある」と回答したのは19.4%と少数に留まった。

図表 2-24 「障害者の生涯学習の推進について」の閲覧経験の有無：n=500



2-5 主な調査結果の整理

【生涯学習への取組状況・生涯学習に関する経験】

- 「この1年くらいの間月に1日以上」、生涯学習に取り組んだかについて聞いたところ、56.6%が「特に取り組んでいない」と回答した。(図表 2-11)
- 生涯学習に取り組んでいない人に生涯学習への関心の有無を聞いたところ、「全く関心がない」の割合が 29.3%、「あまり関心がない」の割合が 24.7%と高い一方、「とても関心がある」「やや関心がある」の割合を合わせても約 15%に留まった。(図表 2-12)
- 住んでいる地域でどのような生涯学習に取り組むことができるか、どれくらい知っているかを聞いたところ、「まったく知らない」の割合が 31.0%、「あまり知らない」の割合が 26.4%と高く、「よく知っている」と回答したのは 8.0%に留まった。なお、生涯学習への関心の有無別にみると、関心が薄ければ薄いほど、「まったく知らない」の割合が高くなっており、全く関心がない人の 81.9%は「まったく知らない」と回答している。生涯学習に関する認知の度合いと、関心の度合いには関連が見られる。(図表 2-14)
- 自身(本人)の障害が理由で生涯学習に参加できなかった経験の有無を聞いたところ、「参加を拒否されたことがある」「参加を断念したことがある」「参加を希望するに至らなかったことがある」のいずれかを回答した人が 27.6%に上り、一定数の障害者が、生涯学習への参加にハードルを感じた経験を持つことがわかる。(図表 2-16)

【生涯学習に関する情報収集について】

- 普段の生活における情報収集の方法についてみると、「インターネットの情報検索」の割合が 50.0%、「テレビ・ラジオ」の割合が 48.6%と高く、多くの障害者が情報源として活用している。(図表 2-19)
- 生涯学習に取り組んだ場合の、生涯学習活動に関する情報の入手元をみると、「新聞、雑誌、書籍(専門誌含む)」(28.6%)、「テレビ・ラジオ」(24.0%)といったマスメディアや、「インターネットの情報検索」(30.0%)「インターネットの動画投稿・共有サービス(YouTube等)」(24.0%)といったインターネットによる情報の入手の割合が高い。(図表 2-20)
- インターネットを利用して情報収集を行う際、自身(本人)の障害により困難を感じ

るかどうか聞いたところ、「非常によくある」の割合が 12.4%、「よくある」の割合が 14.2%となっており、「たまにある」と合計すると回答者全体の約半数に上る。(図表 2-21)

第3章 自治体、法人、団体等ヒアリング調査

3-1 調査概要

3-1-1 調査目的

本調査は、先進的に「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信を行っている自治体等に調査を実施し、情報発信の内容や方法、成果、課題を把握、整理することを目的とする。

3-1-2 調査内容

(1) 調査方法

オンラインでの聞き取り調査

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下の通りである。

- ・ 情報発信の開始時期・取り組んだ背景
- ・ 情報発信の方法・内容
- ・ 当事者に情報を届けるうえで重要なポイント、必要となる工夫等
- ・ ユーザビリティへの配慮
- ・ 効果、課題と今後の展望 等

(3) 調査対象

デスクリサーチの結果、「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信を行っている以下の4団体を対象とした。

- ・ 兵庫県教育委員会社会教育課
- ・ 福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局 青少年政策課
- ・ 大分県教育庁社会教育課
- ・ 公益社団法人東京都障害者スポーツ協会

3-2 調査結果

調査結果は次頁以降の通り。

(1)兵庫県の取組

県内の学びの場を集約し障害者が自分にあった条件で検索できるアプリ 『「学び場」検索アプリ』を構築

【取組に至った背景】

兵庫県は、平成30年度より文部科学省の推進事業を受託し障害者の学びの支援に取り組んでおり、その一環として令和3年度、障害者が利用しやすい学びの場を集約するアプリを立ち上げた。

兵庫県では令和2年度に、Excelの学びの場一覧を作成したが、障害者にとって検索しにくいという課題が残されていた。また、知的障害者を対象に実施したアンケート調査の結果、学習意欲はあるが活動していない人が多く、身近にある学びの場を知らないとの声が多数寄せられたこと、さらに活動団体からも、活動をどう周知すればいいかわからない等の声があったことを背景に、当事者と団体をつなぐアプリを立ち上げた。

【取組内容】

文部科学省委託事業「学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業」の一環として、県内の学びの場を集約し、障害者が自分にあった条件で検索できるアプリ『「学び場」検索アプリ』を構築し、情報の発信を行っている。

URL : <https://hyogo-learninglist.glide.page>



このアプリでは、障害者の生涯学習の場（活動団体及び社会教育施設等）を、地域や興味関心のあるグループごとに探すことできる機能を提供している。

活動団体の情報は、文部科学省委託事業で任命したコーディネーターのコネクションや、共に学び、生きる共生社会コンファレンスや研修会で地域に周知したりすることによって収集した。

各団体の情報としては、団体名や活動の写真、活動内容の説明、参加形態と活動日、そして関連ホームページのリンクを掲載している。すべての情報がアプリ内で得られるわけではないものの、生涯学習に興味を持ったユーザーがリンクから団体の詳細へアクセスできるようになっており、このアプリをきっかけに生涯学習に取り組めるような設計としている。

【取組の工夫】

《県と地元の大学で役割分担し、アプリを運営》

文部科学省委託事業の事務局を、兵庫県と神戸大学が共同で行っており、アプリの管理・運営は神戸大学が中心となって行っている。県単独でアプリを運営しようとすると、更新作業や管理を外部業者へ委託する必要がある、費用が負担になる可能性がある。その点を神戸大学が直接担うことで業者への委託が不要となり、費用を抑えて安定した運営を続けることができる。一方でアプリの広報・周知には県教育委員会のネットワークを活用するなど、有効に役割分担を行っている。

なお、アプリ自体も利用料がかからないサービスを用いて開発しており、上述の管理費用がかからない点も含め、国の委託事業が終了した後も継続してアプリを提供できるようにしている。

《特別支援学校を通じたアプリの周知》

障害者が学校卒業後も学びを継続するためには、学校在籍中から生涯学習に関する関心を高め、学びの場に接続することが重要となるが、特別支援学校生徒ならびにその保護者のアプリに対する認知度は十分でないという課題がある。

そこで令和5年度、特別支援学校2校の高等部の教職員に対し、本アプリに関する研修を行った。教職員がホームルーム等で生徒にアプリを紹介し、実際に使ってもらうことを目的としている。また、令和6年度は、全県立特別支援学校担当者を対象に研修を実施す

るとともに、特別支援学校にバナーを配布して、学校のホームページに掲載を依頼し、障害当事者や保護者の認知度向上に取り組んでいる。

そのほか、県の研修会やコンファレンスで周知する、県と神戸大学のホームページに掲載する、神戸大学の知的障害者向け学習プログラム KUPI (Kobe University program for inclusion) で紹介動画を作成してもらうなど、多面的に認知度向上を図っている。

【成果と課題】

登録団体から、アプリを通じた問い合わせがあったことが報告されている。上述の周知を進めることで、アプリを介した活動が今後より一層増加することが期待される。

現在は、阪神、神戸など人口が多い都心部は掲載情報が多い一方、その他の地域は少ない傾向にある。支援者間のネットワークを介してアプリの認知度を上げ、学びの場を新規開拓し、地域差を解消することを今後のめざす方向性としている。

(2)福岡県の取組

県の生涯学習ポータルサイト「ふくおか生涯学習ひろば」に掲載の講座・イベント情報を「障がい者の文化・スポーツ」というカテゴリで検索できるよう、サイトを改善

【取組に至った背景】

福岡県は、平成21年より県内の学習情報を集約したポータルサイトを運営してきたが、掲載されている講座・イベント情報を見ても、誰でも参加が可能なのか、参加に制約があるのかわからないという課題があった。そこで令和5年度、新たに講座・イベント情報の検索項目に『障がい者の文化・スポーツ』と『シニア向け』の二つを追加し、これら学習機会から遠のきやすい方々が参加可能な講座・イベント情報を、簡単に検索できるよう改善した。

【取組内容】

生涯学習情報を集めた県のポータルサイト「ふくおか生涯学習ひろば」の講座・イベント検索機能において、『障がい者の文化・スポーツ』という項目で、障害者が参加可能な講座・イベントをわかりやすく、手軽に絞り込めるようにしている。

URL : <https://www.gakushu.pref.fukuoka.lg.jp/>



(トップページ)

本ポータルサイトは、イベント主催者がサイト利用登録を行い、自身でイベント情報を掲載できる仕組みになっている。そのため、検索項目『障がい者の文化・スポーツ』は、障害者にとっての利便性向上だけでなく、主催者がイベント情報を掲載する際、そのイベントがユニバーサルなものかどうか意識してもらい、それを可視化することにもつながっている。

【取組の工夫】

《障害者支援団体等を通じたサイトの周知》

機能追加と同時に、障害当事者の利用を増やすための方策を検討し、令和6年度は支援団体等を介して障害当事者への周知を実施予定。また、イベント主催者にも利用促進策について意見を聴取し、障害者に手に取ってもらいやすい公民館や医療機関等にチラシ等を配置することによる認知度向上も検討している。機能追加を行って間もないため、今後積極的に周知を進め、利用を増やしていく方針としている。

【成果と課題】

サイト全体のアクセス数は、令和4年度：約6万3千件、令和5年度：約8万4千件、令和6年8月末時点で4万件ほどであり、今後障害者に対する周知を進めることで、本サイトを通じたイベント参加が期待される。

一方、本機能の認知度・理解度はまだ低く、『障がい者のスポーツ・文化活動』として掲載されるイベント情報は多くない。障害者向けのみならず、誰でも参加できるあらゆるイベントに『障がい者のスポーツ・文化活動』のタグ付けが行われるよう、今後は、イベント主催団体や支援団体等に本機能の利用方法を直接説明し、障害者に対しより多くの生涯学習機会の情報が届けられるための取組を続ける方針である。

(3)大分県の取組

🌟 障害者の生涯学習情報に特化したポータルサイト「かたろうえ大分」を立ち上げ、県内の自治体・団体が主催するイベント・生涯学習プログラムの情報を集約

【取組に至った背景】

県内の障害者の生涯学習情報が集約されていないことや、障害当事者に対するアンケートの結果、当事者や保護者、支援者が「生涯学習情報が身近にない」と感じていることが明らかになったことを受けて、令和4年度、文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の一環としてポータルサイトの立ち上げを行った。

【取組内容】

障害者の生涯学習情報に特化したポータルサイト「かたろうえ大分」を通じて、障害者の生涯学習情報の発信を行っている。

URL : <https://www.kataroue-oita.jp/>



(トップページ)



(団体の紹介ページ)

～ポータルサイトの主な内容～

イベント一覧	大分県内の自治体・団体が主催する、障害者が参加できるイベント・プログラム情報。 <u>ジャンル（スポーツ・健康、アート・音楽等）や地域で自分に合ったイベントを手軽に検索が可能。</u>
団体一覧	障害者の生涯学習活動に関する活動を行っている、県内の団体の一覧。 <u>ジャンルで自分に合った団体を手軽に検索が可能。活動内容や問合せ先の他、団体の活動方針等を「ひとことメッセージ」として紹介している。</u>
国や県内の取組み	文部科学省の取組情報、大分県の取組情報、行政職員向けの研修情報等を掲載。
(その他)	お知らせ（最新情報）、学習動画の掲載等。

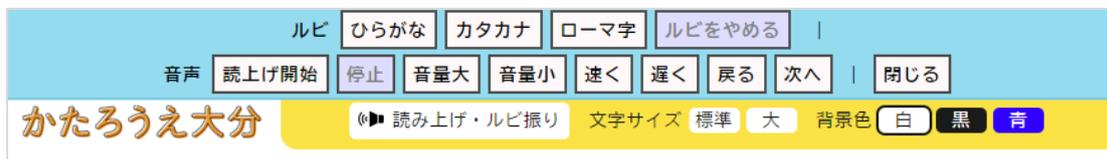
ポータルサイト立ち上げ時、イベント一覧及び団体一覧に掲載する情報は、県が情報提供フォームを用意し、それを県内市町村の生涯学習所管課や、コネクションのある協議会や団体に送付することで収集した。現在は、各年度はじめに県内市町村生涯学習課に情報提供を依頼している。

また、市町村の障害福祉所管課、社会福祉協議会、自立支援協議会などが障害者の生涯学習情報を把握している場合も多いことから、県の研修やイベント等の場で通じ情報提供を呼び掛けている。さらに、サイト内に問い合わせフォームを作っており、個別の団体等からの掲載希望にも対応可能としている。

【取組の工夫】

《アクセシビリティへの配慮》

情報保障の観点から、読み上げ・ルビ振り機能、文字サイズ変更機能、背景色変更機能を設けている。さらに機能面での配慮のみならず、県の運営するサイトではあっても行政用語など難しい言葉を使わずに、易しい・優しい日本語を使用するようにしている。



(読み上げ・ルビ振り機能、文字サイズ変更機能、背景色変更機能)

《特別支援学校を通じた周知》

「かたろうえ大分」の存在を障害者に認知してもらうため、県内の特別支援学校にチラシを配布している。学校を卒業してしまうと、障害者にアプローチすることが難しくなる

ため、学校在学中から生涯学習への関心を高め、卒業後の学びの場につなぐことが重要となる。特に保護者は、学校卒業後の居場所や、学びの場への関心が高いことから、「かたろうえ大分」の周知を含む、生涯学習の理解・啓発に力を入れている。

さらに、大分県のトップページに「かたろうえ大分」の情報を掲載するなど、より多くの人にサイトを認知してもらえるよう、工夫を重ねている。



(リーフレット)

(大分県 HP トップページ)

【成果と課題】

県のトップページに掲載を行っている効果もあり、立ち上げ当時からサイト利用者数は増加。安定的な利用が見られる。また、実際にイベントを掲載したNPO法人から、「かたろうえ大分」をきっかけに参加者があったという報告があるなど、障害者と学びの場をつなぐ効果が少しずつ見られ始めている。

他方、定量的な効果検証が容易でないことが明らかになってきていることから、今後より一層の利活用を推進すると同時に、ポータルサイトの成果を立証する方法の検討を進めていくことにしている。

(4)公益社団法人東京都障害者スポーツ協会の取組

🌈 パラスポーツ情報を集約したポータルサイト「TOKYO パラスポーツ・ナビ」を通じて
 パラスポーツに関心を持つすべての人に情報を発信

【取組に至った背景】

東京都障害者スポーツ協会と東京都は2012年に、パラスポーツ情報を発信するポータルサイト「TOKYO 障スポ・ナビ」を開設した。当時市内には2つの障害者専用スポーツ施設があり、各施設やスポーツ協会がそれぞれ情報発信を行っていたものの、情報が分散して利用者のためにわかりにくいという課題があった。そこで、2012年の東京オリンピック・パラリンピック立候補によるスポーツ機運の高まりも後押しとなりながら、東京都と共同でパラスポーツに関する情報を一元化したポータルサイトを開設した。

令和6年2月には「TOKYO パラスポーツ・ナビ」としてリニューアルを実施。従来のコンテンツを継承しつつ、デザインを刷新し使い勝手の向上を図り、現在に至っている。

【取組内容】

パラスポーツ専門ポータルサイト「TOKYOパラスポーツ・ナビ」を東京都と共同で運営し、幅広いパラスポーツ情報の発信を行っている。

URL : <https://www.tokyo-parasports-navi.metro.tokyo.lg.jp/>

～ポータルサイトの主な内容～

パラスポーツ情報	パラスポーツの大会やイベントのレポート、パラアスリートのインタビュー記事、競技紹介等を掲載。 <u>障害当事者や支援者はもちろん、パラスポーツに興味を持つ幅広い人々がパラスポーツへの理解を深められるようなコンテンツを掲載している。</u>
施設検索機能	都内の区市町村別/スポーツ種目別に、都内公立スポーツ施設の検索を行うことができる。 <u>具体的かつ詳細なバリアフリー情報で絞り込んで検索を行うことができ、障害当事者一人ひとりが、施設を利用するにあたって必要な情報を事前に得ることができる。</u> 【バリアフリー情報による検索項目の例】 <ul style="list-style-type: none"> ・最寄りの駅又はバス停から施設まで階段や急な坂道が無い ・出入口に音声案内がある ・トレーニング室において、車いす等でも移動がしやすいような動線が確保されている ・手話対応できるスタッフがいる <p style="text-align: right;">等</p>
イベント検索機能	都内の区市町村別/スポーツ種目別にパラスポーツイベントの検索を行うことができる。

クラブ・団体検索機能	活動地域別/スポーツ種目別にスポーツクラブや団体の検索を行うことができる。
------------	---------------------------------------



(トップページ)

(大会・イベントレポート)

【取組の工夫】

《詳細なバリアフリー情報の掲載》

施設検索機能に関しては、令和3年度に肢体不自由、視覚障害のある当事者やバリアフリーに関する知見を持つ有識者にヒアリングを実施。障害者にとってどのような情報が事前に必要かを検討し、サイトに掲載するバリアフリー情報を決定した。

障害当事者に自分に合った条件の施設を見つけてもらいやすくしてスポーツ実施につなげてもらうこと、またパラスポーツ団体に活動の場を見つけてもらいやすくし、日々の活動に繋げてもらうことを目指している。

《パラスポーツ指導員の講習会等で「TOKYOパラスポーツ・ナビ」を活用》

日本パラスポーツ協会が認定する資格者「パラスポーツ指導員」は、資格を取得しても、約 6 割がその後の活動に結びついていないことがわかっている。資格取得後にどれだけ早く活動を開始したかによってその後の活動状況が大きく変わるため、資格を取得した一人

ひとりが自分に合った活動場所の情報を見つけられるよう、東京都では講習会で「TOKYO パラスポーツ・ナビ」を紹介している。

その成果もあり、パラスポーツ指導者からは実際に指導の現場で TOKYO パラスポーツ・ナビを活用しているという声も寄せられ始めている。

【成果と課題】

令和6年5月時点で、約200件のイベント、約650のスポーツ施設、約90のクラブ・団体の情報を掲載しており、一定の情報提供を実現することができている。

サイト掲載による反響もあり、例えば、八王子市で活動しているクラブを特集記事として取り上げたところ、他の地域から加入希望があり、メンバーを増やすことに繋がった。また、障害者専用スポーツ施設の利用者からは、TOKYO パラスポーツ・ナビで自身の暮らす地域にクラブがあるか調べ、加入につながったという声があった。

サイトの周知に更なる取組の余地があるため、SNS の利用や、各種イベントやボランティア講習会でのチラシ配布、福祉・医療関係者へのパンフレット配布等、デジタルとアナログの両輪で認知度向上を図ることとしている。

第4章 調査結果のまとめ

本章では、アンケート調査結果及びヒアリング調査結果を踏まえ、今後の障害者の生涯学習推進のために必要と考えられる方策ならびに望ましい情報発信のあり方について整理する。

4-1 障害者の生涯学習推進のための方策について

調査結果を踏まえると、今後の障害者の生涯学習推進のための方策として、以下が考えられる。

(1) 無関心層に対する生涯学習の認知度向上

本調査では、この1年ほどの間に生涯学習に取り組んだ障害者の割合は半数弱であった。取り組んでいない障害者の生涯学習に対する関心の有無を見ると、関心を持っているのは1割強で、生涯学習に関心を寄せていない者が多数となった。さらに、地域で取り組むことのできる生涯学習の内容を「よく知っている/ある程度知っている」と回答したのは回答者全体の全体の4分の1程度と、生涯学習活動自体の認知度も低いことが明らかになった。

今後、障害者の生涯学習のすそ野を広げていくためには、生涯学習に関心が無い人に関心をもってもらうための施策が必要であり、そのためにはまず、地域にどのような生涯学習の場が存在しているのか、どのような活動に取り組めるのかを、障害者（およびその家族）一人ひとりに知ってもらう事が重要と考えられる。

ヒアリングでは、障害により引き込みがちだったところ、生涯学習参加をきっかけに外出するようになった例や、生涯学習を通じて苦手だった他者との交流が徐々にできるようになった例など、生涯学習活動が本人の幸福度につながっている例が見られた。こうした生涯学習活動のメリットを広めていくことも、生涯学習への関心を高めるうえでは有効と考えられる。

(2) 障害者の生涯学習参加への障壁の解消

今回のアンケート結果では、障害が理由で生涯学習に参加できなかった（参加を断念した）経験を持つ障害者が回答者全体の3割弱であった。生涯学習に参加しようとしたことがある人に限るとそうした経験を持つ人が6割弱に上った。参加できなかった理由を見る

と、会場までの移動手段や設備に課題があり参加を断念した経験や、障害によって健常者と同等の活動ができない不安から参加を諦めた経験等が見受けられる。障害者の生涯学習推進のためには、障害者向けの生涯学習プログラムを増やしていくことや、既存の学びの場をよりユニバーサルな環境に変えていく努力が、引き続き必要といえる。

(3)合理的配慮の提供やバリアフリーに関する積極的な情報発信

次節の情報発信に関連する点でもあるが、障害の有無に関わらず参加できるプログラム・イベントであればその旨を明示すること、また、どのような合理的配慮が提供可能か、会場はどの程度バリアフリー化がされているかについて詳しく情報提供することで、障害者が生涯学習に参加する際の心理的なハードルを下げるのが、当事者ヒアリング及び自治体等ヒアリングから示唆された。生涯学習プログラム・イベントの主催者及び自治体の生涯学習担当者等はこうした点にも留意し、障害者が安心して参加できるプログラム作り・周知に努めることが望ましい。

4-2 「障害者の生涯学習の普及推進」のための情報発信のありかたについて

調査結果を踏まえると、障害者の生涯学習の普及推進のための、望ましい情報発信のありかたとして、以下が考えられる。

(1)ポータルサイト・アプリ等、インターネットの積極的な利用

アンケートからは、生涯学習に関係するか否かを問わず、インターネットで情報収集を行う障害者が多いことが分かった。自治体担当者や支援者が、タイムリーかつ写真や動画等様々な手段をもって情報発信ができるという意味でも、地域のイベントや生涯学習講座等、障害者の生涯学習に関する情報を発信する上ではインターネットの活用が有効といえる。

自治体等へのヒアリング調査でも、障害者の生涯学習ポータルサイトの新規立ち上げや既存ポータルサイトの改善、アプリの作成など、インターネットでの効果的な情報提供のための取組が行われている。こうした取組が今後一層拡大していくことが期待される。

(2) インターネット利用に困難を感じる人・利用していない人への配慮の必要性

インターネットを活用した情報提供が効果的である一方で、アンケートからは、インターネットによる情報収集に困難を感じる障害者が多く存在することが明らかとなっており、十分なアクセシビリティが確保されるよう、ホームページの構築にあたって合理的配慮の提供に留意することは必須である。また、障害当事者ヒアリングの対象者のように、インターネットをまったく利用していない障害者がいることにも配慮し、支援者のネットワークや広報誌による情報提供等、複数の情報チャネルを並行して利用していくことが重要と考えられる。

(3) 福祉部局のネットワークや自治体が持つ媒体を活用し、無関心層に周知

インターネットを利用する場合は、自らが求める情報を検索し取得する必要があるため、関心が無い人に生涯学習活動の情報を届ける際には、有効な手段とは言えない。そのため、障害福祉サービス事業所や施設職員、相談支援専門員等支援者を介した情報提供や、広報誌や生涯学習に関する冊子を各種公共施設に配置する等、まずは活動の存在を認知してもらい、その後でインターネットでの情報に結びつけるといった工夫が必要である。

当事者ヒアリングでも、障害者本人は生涯学習への関心が薄かったが、家族が自治体の広報誌でスポーツ教室を知ったことをきっかけに、活動に取り組み始めた例がみられた。

その際は、自治体が域内の生涯学習プログラム・イベント等の情報を積極的に集約し、福祉部局が有する障害福祉サービス事業所とのネットワークや、自治体が保有する媒体を有効に活用して発信することで、効率的かつ網羅的な情報提供を図っていくことが有効と考えられる。

(4) 特別支援学校との連携による早期からの生涯学習意欲の向上

より長期的には、特別支援学校や特別支援学級において、学校卒業後の学び・余暇に関する指導や学びの場の紹介を行うことで、学校卒業後の学びへの関心・意欲を高めていくことも有効と考えられる。

自治体等ヒアリングでも、障害者の生涯学習ポータルサイトについてのチラシを特別支援学校に配布して周知したり、特別支援学校高等部の教職員にアプリの研修を行ったりする取組例が見られた。今後も自治体等と特別支援学校が連携して早期からの生涯学習情報の提供に取り組んでいくことが期待される。

第5章 文部科学省 障害者学習支援推進室ポータルサイトの開設

5-1 事業目的

障害者、その支援者・保護者を対象とした調査及び自治体、法人、団体等ヒアリング調査の結果を踏まえ、障害者の生涯学習推進ポータルサイトを作成し、障害者の生涯学習の推進に関する取組の普及・啓発を目的とする。

5-2 既存のホームページの現状・課題

文部科学省では従来、ホームページ上に「障害者の生涯学習の推進について」ページを作成し、障害者の生涯学習推進に係る施策・取組等の情報を公開してきた。

障害者の生涯学習の推進は、【ア.調査研究事業による現状分析・課題把握】⇒【イ.自治体・団体等に委託する実践研究事業による事例の蓄積】⇒【ウ.当事者参加型フォーラムやコンファレンス、アドバイザー派遣による普及・啓発（+新たな課題とテーマの発掘）】⇒再び【ア】…というサイクルを回すことを通して進められてきた。「障害者の生涯学習の推進について」ページは、特に自治体の生涯学習担当者を始めとする支援者に対し、【イ】で蓄積した事例を横展開したり、【ウ】の理解啓発の取組を動画や資料を通してより広く周知したりするなど、国の各種事業の成果を最大化し、障害者の生涯学習支援を推し進める役割を担っている。

しかし、既存のページは、特に情報の配置やデザインの面で以下のような課題がある。文部科学省の各種施策の紹介の役割は果たすものの、自治体の生涯学習担当者にとって情報を取得しやすいとは言いつらく、好事例の幅広い展開や理解・啓発という面では改善の余地が多い。

- ・ トップページにおいて、好事例、調査研究成果、自治体窓口一覧、資料等、内容の全く異なるトピックが混在し、区別が困難
- ・ トップページにおいて、当事者向けと自治体担当者等支援者向けで、ターゲットが異なるトピックが混在し区別が困難
- ・ 自治体担当者等支援者の取組のヒントとなる好事例情報が、ページの深い階層にあり、アクセスしづらい
- ・ 好事例の内容が、ページ上で確認できず、閲覧者が自身の関心に応じた事例を閲覧することが困難

- ・ アクセシビリティへの配慮が無く、障害者が閲覧するのが困難な可能性がある

The screenshot shows the MEXT website page for '障害者の生涯学習の推進について'. The page layout includes a top navigation bar with categories like '会見・報道・お知らせ', '政策・審議会', '白書・統計・出版物', '申請・手続き', and '文部科学省の紹介'. Below the navigation is a breadcrumb trail: 'トップ > 教育 > 生涯学習の推進 > 障害者の生涯学習の推進について'. The main content area has a heading '障害者の生涯学習の推進について' and a sub-heading '障害者の生涯学習の推進についてお知らせします。'. A paragraph explains the government's commitment to supporting persons with disabilities through education and culture. The '新着情報' (New Information) section lists several recent announcements with dates and links, such as '令和6年6月18日 令和6年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」について'. The '取組の概要等' (Summary of Initiatives) section contains several bullet points detailing various programs and research. A sidebar on the right contains a list of related links, including '障害者の生涯学習の推進について', '都道府県・指定都市 障害者学習支援担当窓口一覧', and '「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」について'.

図表 5-1 文部科学省ホームページ「障害者の生涯学習の推進について」

トップページ³

³ https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/index.htm (令和6年6月時点)

5-3 ポータルサイト開設の方針

5-3-1 基本方針

本事業では、「文部科学省障害者学習支援推進室ポータルサイトの開設」として、特に自治体担当者等の支援者をメインユーザと想定し、情報の整理やユーザビリティに配慮したデザインによって、各閲覧者が自身の求める情報にアクセスしやすいポータルサイトを構築する。このことにより、国が行う実践研究事業や理解啓発事業の効果を最大化し、障害者の学校卒業後における学びの支援の推進をさらに加速させることを目指す。

なお、今回は情報の配置方法やデザイン面からの利便性向上を図ることとし、掲載内容については既存の「障害者の生涯学習の推進について」ページを引き継ぐこととする。

5-3-2 基本方針実現のための方策

上記基本方針を実現する為の具体的な方策について、以下の通り整理した。

課題	方策
トップページにおいて、好事例、調査研究成果、自治体窓一覧、資料等、内容の全く異なるトピックが混在し、区別が困難	<ul style="list-style-type: none">・ホームページ上の情報を内容と重要性に応じて精選・整理する。・情報の内容を表現したアイコン・写真を配置し、各情報を区別しやすくする
トップページにおいて、当事者向けと自治体担当者等支援者向けで、ターゲットが異なるトピックが混在し区別が困難	当事者向向けの情報（都道府県・指定都市障害者学習支援担当窓一覧）は、他の情報と混同しないような形式で表示
自治体担当者等支援者の取組のヒントとなる好事例情報が、ページの深い階層にあり、アクセスしづらい	トップページに事例検索機能を設ける
好事例の内容が、ページ上で確認できず、閲覧者が自身の関心に応じた事例を閲覧することが困難	事例検索機能の検索項目として地域・対象（障害種別）・活動内容を設ける
アクセシビリティへの配慮が無く、障害者が閲覧するのが困難な可能性がある	<ul style="list-style-type: none">・文字サイズ変更機能を実装・イラスト・写真等、視覚的な情報によるわかりやすいデザイン

5-4 開発内容

5-4-1 トップページ

各閲覧者が自身の求める情報にアクセスしやすいポータルサイトとするために、主にレイアウト及びデザイン面での工夫を講じた。

第一に、トップページにアクセスしてすぐ表示されるエリア（ファーストビュー）にスライダーを配置し、特に重要なコンテンツにアクセスする導線を確認した。また同じく目に入りやすい位置に『「共生社会のマナビ」サイトについて』として本ポータルサイトの説明を配置し、本サイトの位置づけを閲覧者が理解できるよう配慮した。（図表 5-2①）

第二に、好事例検索機能をトップページ中段に設け、トップページから直接生涯学習の好事例を検索できるようにした。（図表 5-2②）検索機能の詳細については次節で詳細に述べる。

第三に、障害当事者や支援者向けの情報である「都道府県・指定都市障害者学習支援担当窓口一覧」は、その他の情報から切り離して配置した。また表示形式も他のトピックと区別し、施策情報等を閲覧したい人が選択しないように、また、反対に自治体窓口情報を閲覧したい人がその他の情報を選択しないように配慮した。（図表 5-2③）

第四に、トップページに表示するトピックについて精選した。従来のページでは10以上のトピックが並列して表示されていたが、ポータルサイトを構築する上で文部科学省と調整の上、8つに絞った（表示しないトピックは「関連資料」から閲覧できるようにした）。また、各トピックの内容と関連したイラスト・写真を配置することによって、視覚的にわかりやすく、求める情報に行き着きやすいデザインとした（図表 5-2④）。



図表 5-2 文部科学省ホームページ「障害者の生涯学習の推進について」

5-4-2 事例検索機能

「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」の成果及び『「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰』の表彰団体を事例として検索できる機能を実装し、トップページからの検索を可能にした。

事例検索は、①受託団体・表彰団体の所在都道府県、②活動の対象（障害種別）、加えて文部科学大臣表彰の事例は、③活動内容でも検索可能とした。また、各団体の研究内容・活動内容データをテキストでデータベースに登録することで、関連キーワードでの検索も可能とした。

検索項目	カテゴリ
①都道府県	47 都道府県
②対象	視覚・聴覚・精神・知的・発達・肢体・内部障害・難病等・重度重複・その他
③活動内容 (文部科学大臣表彰)	学習・文化芸術・スポーツ・情報保障・普及啓発・その他

The screenshot displays a search interface with the following components:

- Search Bar:** Keyword 'ボッチャ' (Boccia).
- Filters:**
 - 種別 (Type): Radio buttons for 'すべて' (All), '実践研究' (Practical Research), and '文部科学大臣表彰' (Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology Award).
 - 都道府県 (Prefecture): Dropdown menu set to '東京都' (Tokyo).
 - 対象 (Target): Dropdown menu set to '肢体' (Physical).
 - 活動内容 (Activity Content): Dropdown menu set to 'スポーツ' (Sports).
- Search Buttons:**
 - Q 入力した条件で検索 (Search with entered conditions)
 - 詳細条件を指定して検索 (Search with detailed conditions)
- Search Results:**
 - 検索結果: 3件 (Search Results: 3 items)
 - 大臣表彰 令和4年度 一緒に当たり前の社会へ(全国) (Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology Award Heisei 4th Year Together with Us Ordinary Society (Nationwide))
 - 団体名・氏名: 一般社団法人日本ボッチャ協会 (General Incorporated Association Japan Boccia Association)
 - 主な活動場所: 全国 (Main Activity Location: Nationwide)
 - 対象: 視覚/聴覚/精神/知的/発達/肢体/内部障害/難病等/重度重複/その他 (Target: Vision/Hearing/Spiritual/Intellectual/Development/Physical/Internal Disabilities/Difficulties/Severe Repetition/Other)
 - 活動分野: 学習/スポーツ (Activity Field: Learning/Sports)

図表 5-3 検索結果画面

5-4-3 アクセシビリティへの配慮

視覚障害のある閲覧者に対するアクセシビリティへの配慮として、文字サイズ変更機能を新たに実装した。また、第2章「障害者、その支援者・保護者を対象とした調査」の当事者ヒアリングで意見があったように、読字に困難を抱える人もいることから、トップページではイラストや写真を利用し、わかりやすいデザインとした。

そのほか、アクセシビリティの確保のため、以下の基準に則り、作成を進めた。

<p>準拠または目標とした基準</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本産業規格 JIS X8341 シリーズ「みんなの公共サイト運用モデル」(総務省) ・JIS X 8341-3:2016「高齢者・障害者等配慮設計指針-情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス-第3部:Web コンテンツ」 <ul style="list-style-type: none"> —適合レベル AA に準拠することを目標とした。 —適合レベル AAA のうち、以下の達成基準についても可能な範囲で適用した。 <ul style="list-style-type: none"> —2.1.3 キーボード(例外なし)の達成基準 —2.3.2 3回のせん(閃)光の達成基準 —2.4.8 現在位置の達成基準 —3.2.5 要求による状況の変化の達成基準 ・「Web Content Accessibility Guidelines(WCAG) 2.1」で追加された達成基準についても、可能な範囲で適用した。 <ul style="list-style-type: none"> —1.3.4 表示の向き(レベル AA)—2.5.1 ポインタのジェスチャ(レベル A) —2.5.2 ポインタのキャンセル(レベル A) —2.5.4 動きによる起動(レベル A) —4.1.3 ステータスメッセージ(レベル AA) ・デジタル庁が整備する「ウェブアクセシビリティ導入ガイドブック」に準拠した。
<p>品質管理の方法</p>	<p>JIS X 8341-3:2016「高齢者・障害者等配慮設計指針-情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス-第3部:Web コンテンツ」については、総務省が提供する「みんなのアクセシビリティ評価ツール:miChecker (エムアイチェッカー)Ver.3.1」を利用してポータルサイトのソースコードに対しチェック作業を実施した。</p>

